

若いうちに触れた世界、価値観が
現在の自分の財産です



原丈人 George Hara テファ・パートナーズ グループ会長(実業家)

はら・じょうじ ●1952年大阪生まれ。大学卒業後、中米にて考古学研究に従事。29歳で光ファイバー事業を起業し成功。ベンチャー企業の育成と経営に携わるテファ・パートナーズ設立。シリコンバレーを代表する実業家。バングラデシュで遠隔医療を行なうインフラづくり、アフリカで栄養不良改善に向けた「スピルリナ」(高タンパク質食用微細藻)を活用するスピルリナ・プロジェクトなど、途上国支援にも注力。アライアンス・フォーラム財団代表理事、国連WAFUNIF代表大使、財務省参与、内閣府政府税制調査会特別委員。著書に『21世紀の国富論』(平凡社)、『新しい資本主義』(PHP新書)がある。

大学時代、世界の鉄道車両を見に出かけた中米で、エジプトにしかないとと思っていたピラミッドを見て感動し、それがきっかけで卒業後、27歳になるまで、中央アメリカのインディオの移動経路をテーマとした考古学の研究をしていました。そのうち、考古学を仕事にするか迷って結局、シャーリーマンのように実業をしながら余った時間で自分の好きな考古学をすることを選びました。

そこで、ビジネスの勉強をしようと、アメリカ西海岸のスタンフォード大学の経営大学院に入りました。当時、大学のあるシリコンバレーは最先端の技術を生み出す所とも言えないわくわく感がありました。そんな彼らを見て、新しい技術を発掘して育てる「ベンチャーキャピタリスト」になりたいと思いました。でも、その仕事は経営の経験とある程度の資金がないと始めることができません。結局、無謀と思われるかもしれません、光ファイバーを使ったディスプレイ・システムの会社を立ち上げようと、在学中に事業計画を書き上げました。創業後は必死であちこちに営業しました。最終的な契約になかなか至らず非常に苦しかったのですが、当時のディズニーの副社長が私を信じてわれわれの光ファイバー技術を採用してくれました。このとき、ビジネスは「人ととのぶつかり合い」であり、もちろん肩書き、プレゼンの巧さ、語学力、知識・教養も必要でしょうが、やはり相手の心に飛び込むことが大切だと強く感じました。

になり、多くの革新的な技術を育ててきました。研究レベルから探し、それを具現化するべく事業化し、お金と労力をつぎ込みます。ベンチャー(冒険)という名のとおり、精一杯経営に関わりますが、3社に2社はつぶしてしまうくらいリスクの高いものです。それでも残った1社は従業員何百、何千人となり、社会を大きく変える技術が世の中に出ています。

ただ、90年代後半ころに入ると、ベンチャーキャピタルは変質していきます。本来、技術を育てるサポート役であるはずが、単なる「金融業」に変わっていったのです。技術の種子を実用化するには5年、7年と時間がかかるのですが、金融業になってしまったベンチャーキャピタルは短期間で投資したお金の回収を求めてきます。彼らの根底にあるのが、「会社は株主のもの」という間違った考え方です。この考え方方が主流になると、短期的に成果が上がらないものは切り捨てられ、希望ある技術をもつベンチャーの多くが葬り去られました。また、長い時間をかけて育成したベンチャー企業も株式公開するとヘッジファンドの餌食になりました。私は、この頃から「会社は株主のもの」という考えが世の中に多くの有用な企業を崩壊させてしまうと危機感を持ち始め、その次の時代の価値観となる新たな仕組みを創らなくてはと思いました。これが、アライアンス・フォーラム財団が始めた「公益資本主義」の研究です。2007年には東京財団を交え、ノーベル経済学賞学者たちが打ち立てた金融資本主義に対抗すべく、世界中の熱意のある若者

と研究を進めています。

新しい技術を使って、世界を変えていく—考古学と、現在のコンピュータ産業の次の技術が創っていく実業とが重なっていきます。たとえば、「発掘した壺の破片がどのようにになっているのか」、遠方の人と映像でのやりとりにおいて当時のものすごく高価で不便だったテレビ電話が安く簡単にできないかと、テレビ電話会議システムの開発にも関わりました。そして革新的な技術を先進国だけでなく、本当に必要としている途上国でも役に立てたいと考えるようになりました。

そこで、バングラデシュにて現地NGOのBRACと合弁でbracNet社を設立しました。最先端ワイヤレス高速通信のWiMAXという技術を使い、首都ダッカをはじめ農村部も含め国内全域での事業展開を行っています。また、XVDという動画圧縮技術を用いて既存のインフラにおいて遠隔医療・教育という分野の事業による支援もバングラデシュをはじめ、アフリカ、ラテンアメリカでも進めています。

若い人に言えることは、自分の今ある価値観と異なるものを見て感じ、それを自分の糧にしていってほしいということです。一般常識に無条件に従うではなく、自分が素直に考えたものを大事に、興味のある分野に楽しみを持ってやり続けていけば将来無駄になることはないはず。それがお金では買えないすばらしいものになると私自身の経験から思っています。

■
1985年にベンチャーキャピタリスト